

《茨城支部ニュースレター2月号》

平成31年2月2日(日)、日本臨床発達心理士会茨城支部
平成30年度第2回公開講座(第4回資格更新研修会)が行われました。

1 場 所 茨城県県南生涯学習センター

2 内 容 「発達臨床の視座から見るアタッチメント」
講師 東京大学大学院教育研究科

遠藤 利彦 氏

3 参加者 56名 (一般 35名/会員 21名)

4 研修内容

○ はじめに

・育児で大切なのは「ほどよい関係」。いつも思い通りにはならない関係のなかで、適度なストレスやフラストレーションが子どもの感情コントロールの力、レジリエンスを育てる(D.W. ウィニコット)。

○ ジョイントネス

・「ジョイントネス」とは子どもと大人が感情的につながること。対象は特定されない。

・ハイリスク児(低体重児など)は、人に感応する・感応させる力が弱いのでジョイントネスが育ちにくい。ジョイントネスの希薄さゆえに、養育者との関係を築きにくく、不適切な養育にさらされやすい。

○ アタッチメント

・不安なときに、特定の信頼できる人にくっついて安心できること。ずっとくっついていてくれるのではなく、自分のことをいつも見てくれている、その感覚が大切。

・「安心感の輪」が少しずつ大きくなっていくことが自立であり成長である。

○ 剥奪研究 ~BEIP チャウセスク政権崩壊後に劣悪な環境で育った子供たちの縦断研究~

・生理的な欲求は満たされる物理的な環境条件で育っても、人的な環境に恵まれなければ、心身ともに健やかな発達はできない。=アタッチメントの剥奪

○ 介入研究 ~ ベリー就学前計画 ~ ジェームズ・ヘックマン

・貧困家庭の子どもたちを三歳から2年間幼児教育を受けた群とそうでない群で比較研究。40歳段階で、幼児教育群は、より健全な生活を送っている。

・幼稚園には、温かい感情・常識・良識をもって一貫したかわりをしてくれる大人がいたことで、「非認知」能力を身につけたと言える。

長い年月をかけた縦断研究による膨大なデータから、アタッチメントについてたくさんの知見が得られています。遠藤先生が副センター長を務めておられる「発達保育実践政策学センター」では、こうした研究をとおして得られたエビデンスを、教育や保育の実践や、社会政策にどのように生かしていくかを模索しているそうです。

当たり前のことのなかに、人の一生を左右する大事なことが隠されている。私たち大

新しいテキスト ドキュメント (2).txt

人には、「特別なこと」ではなく、当たり前なこと（愛情をかけて育てること、見守ること、生活習慣を整えてあげることなど）が一貫してできることが求められていることを感じました。

どんなに泣き叫んでも決して見捨てられないで、無条件的に受け入れてもらえること、愛してもらえる、愛してもらえるだけの価値がある自分を感じることが、自己肯定感、自尊心の根っこにある、ということが印象に残りました。

<お知らせ>

○発達性読み書き障害についての研修会（宇野彰先生の研修会の「おさらい会」）

日時：2019年3月21日（木）13:00～17:00

場所：茨城県県南生涯学習センター

内容：宇野彰先生による研修会の内容を振り返り、さらに理解を深めます。

※受講者に限定がありますので、詳細はホームページをご覧ください。

○2019年度 第1回研修会及び総会

日時：2019年4月30日（火） 研修会13:00～ 総会16:15～16:45

場所：茨城県総合福祉会館

内容：事例検討会

※詳細につきましては、茨城県支部のホームページに随時更新されますのでご確認ください。

文責 小室明子